

本学所蔵貴重和装本（和歌・物語）の書誌調査報告

～竹取物語絵巻・伊勢物語・湖月抄・今物語・馬名合・勅撰集・仮名文字遣・自讃歌～
付：白戸満喜子「共立女子大学図書館所蔵古典籍の料紙観察に関する報告書」

岡田ひろみ 咲本英恵 内田保廣 菅野扶美

はじめに

2019年5月に本学図書館所蔵貴重和書展示を和歌・物語関連の作品を中心に行った。そこで展示した古典籍は、「竹取物語絵巻」、「伊勢物語」（伝上冷泉為頼）、「湖月抄」、「今物語」、「仮名文字遣」（伝里村紹巴）、「古今和歌集」、「金葉和歌集」「千載和歌集」（伝一位局）、「十三代集」、「源順馬名合」（伝藤原公修）、「自讃歌」である。その際、書誌事項をまとめた「共立女子大学図書館所蔵貴重和書展示目録 本の見た目をたのしむ」（A4フルカラー全8頁）を作成した。展示用に用意したパンフレットのため、調査した書誌事項を一部加筆し、紀要に記す次第である（それぞれ項目執筆の担当者を項目末尾に記している）。写真も目録掲載場所とは異なるものもある。

また、今回、最後に白戸満喜子氏による上記和装本の料紙観察の報告書を掲載している。これまで料紙の判断は、古筆家はもとより、研究者においても、それぞれ個人の経験や目視・触感によってなされてきたが、近年、マイクロスコープで紙を観察することで科学的に料紙をとらえる研究が行われている。本学所蔵の和装本についても、例えば『金葉和歌集』の料紙は、目視や手触りでは「斐紙」のように見えた（糸賀きみ江 松村雄二「共立女子大学図書館蔵 伝冷泉為秀筆 金葉和歌集（翻刻・解説）」（『共立女子大学短期大学紀要 文科』22号も同様の記載がある）が、マイクロスコープによる料紙観察の結果、繊維の形状により「楮紙」であることがわかった。表面が滑らかな「斐紙（雁皮紙・鳥の子紙とも）」は貴重な紙のため、歌集や王朝物語に用いられることも多く、以下紹介の和装本では「伊勢物語」の料紙は斐紙である。

1. 竹取物語絵巻

蔵書番号W721.2/2/1（上巻）、W721.2/2/2（下巻）。近世初期写。卷子装、上下2巻。[上巻]見返し：縦33.7cm×横27.7cm（八双含）、本紙：縦33.7cm×全長1642.6cm。[下巻]見返し：縦33.7cm×横27.7cm（八双含）、本紙：縦33.7cm×全長1641.5cm。桃果文金欄表紙。見返しには金箔を押す。外題・表紙題箋「竹とり物語 上」「竹とり物語 下」。上下巻とも内題なし。上巻は全37紙に軸付紙1紙を継ぐ。詞10段に絵9段（第10段は制作当初から詞のみ）。下巻は全36紙を継ぎ、軸付紙はなく、第36紙に直接軸を付ける。詞9段に絵8段（第9段は制作当初から詞のみ）。詞書には、金泥で草花の下絵を描いた豪華な料紙を用い、発色の良い顔料をふんだんに使用した絵の格調も高く極めて上質な絵巻である。詞書や画面に欠損・錯簡はなく、保存状態も良好。なお、元箱を欠いており、現在使用されている朱漆塗りの箱は他から転用されたもので、箱書には「御改花桐唐草蒔絵」「壹面」

「式軸」と黒漆で記されている。箱蓋には題箋が貼られており、「竹取物語 式巻」と墨書され、続けて二行の識語（年記か？）も確認できるが、摩耗のため判読できない。

「物語の、出で来きはじめの祖」（『源氏物語』絵合帖）とも称された『竹取物語』は、早くから絵入りの物語として鑑賞さ



竹取物語絵巻下巻・第1段（絵・竜の頸の玉を探す大伴大納言）

れていたはずであるが、中世以前にさかのぼる作例は確認されておらず、現存作例は近世以降のものに限られている（徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究 橘守部作竹取物語絵巻への展開』桜楓社、1978年）。17世紀初頭の制作と見られるチェスター・ビーティ・ライブラリー本が、現存最古と位置づけられ、失われた中世「竹取物語絵巻」の図像をうかがい得る重要作例である。

共立本の制作はこれにやや遅れる17世紀後半と見られ、同じ頃の作例として國學院大学図書館所蔵の二種（武田祐吉旧蔵本、ハイド氏旧蔵本）、立教大学図書館本、国立国会図書館本などが知られている。先行研究において、これら諸本の詞書が正保三年（1646）刊本に近いという点が指摘されているとおり（針本正行「國學院大學所蔵の絵入り物語」『中古文学』86号、2010年、曾根誠一『竹取物語』奈良絵本・絵巻の本文考—正保三年刊整版本の独自異文を視点とした粗描』『花園大学文学部研究紀要』45号、2013年）、共立本制作に際しても同版本が参照された可能性が高い。絵に関しても、絵入版本『竹取物語』（上下二冊、早稲田大学図書館蔵、文庫30 C0003）と共立本との間で、人物の姿態や構図が一部共通している。同本下巻奥付には、京都六角通の書肆小河屋（柳枝軒）店主による「茨城多左衛門板」の刊記があるものの刊年は不明で、絵巻制作との前後関係をただちに断ずることは難しいが、画面内容がより詳しい絵巻の成立が先行すると見ておきたい。

共立本上下巻の詞書は一筆で、17世紀後半の絵本・絵巻に筆を揮った能筆として近年注目されている、朝倉重賢（生没年不詳）の書である可能性が高い（石川透『奈良絵本・絵巻の生成』2003年、三弥井書店）。絵は、町絵師の作風を示すいわゆる奈良絵本系で、絵師の名を明らかにすることはできないものの、朝倉重賢が染筆した絵巻にしばしば同様の画風を見出すことができる（一例として、国文学研究資料館蔵「大国舞」「羅生門」、慶應義塾大学蔵「熊野権現縁起」、大英博物館蔵「役行者絵巻」、ケンブリッジ大学図書館蔵「末ひろがり」など。秋谷治「イギリスにある同一絵師「奈良絵本」三本について」『人文・自然研究』6号、2012年、鈴木親彦・高岸輝・北本朝展「IIF Curation Viewerが美術史にもたらす「細部」と「再現性」』『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』vol2017 no.2、2017年参照）。

共立本を含むこれらの作品群を通じて、該当時期に上質の絵本や上質の絵本や絵巻を量産していた工房の存在が浮き彫りとなる。（山本聡美）

2. 伝上冷泉為頼筆『伊勢物語』

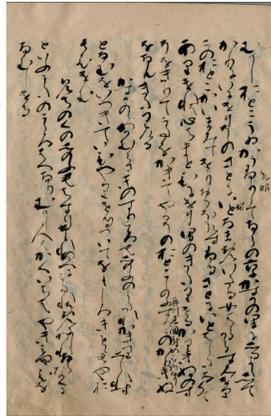
蔵書番号W913.32/27。写本。全1帖。縦24.8cm×横18.3cm。綴葉装（列帖装）。表紙は千種色地紗綾形菊花唐花文錦。外題「伊勢物語」は書題簽、銀塗り。料紙は薄様斐紙。極め札2枚（①「冷泉殿為頼伊勢物語むかしおとこ一冊印」、②「いせものかたり／冷泉為頼卿御筆／外題光廣と見エ候」）。

『伊勢物語』は「昔男」の和歌を核とした短い恋物語を集めた歌物語。伝本には、大別すると、昔男と伊勢斎宮との恋物語（いわゆる「狩の使い」）を初段に持つ小式部内侍本と、昔男の元服と初恋を描く物語（いわゆる「初冠」）を初段に持つ朱雀院本の二種があり、本書は朱雀院本のなかでも125段で構成される定家本の形態を持つ。

伝筆者・為頼は江戸初期の公卿。従三位権中納言。和歌短冊が残っているが、それと比較する限りで本写本は別筆の可能性もある。題簽筆者・烏丸光廣は江戸時代初期の公卿。正二位権大納言。細川幽齋から古今伝授を受けた二条派歌人で、能書家としても知られる。（咲本英恵）



伊勢物語表紙



伊勢物語初段



湖月抄（手ならひ）

3. 『湖月抄』

蔵書番号W913.36/1035～37。版本。縦27.6cm×横19.6cm。五つ目袋綴。表紙は①藍（西村山郡立図書館旧蔵本）、②浅黄・布目、③胡桃色（三浦文庫旧蔵本、はげ目あり）。外題は中央に刷り題簽。藍表紙本は「湖月抄 手ならひ」、浅黄表紙本は「湖月抄 手ならひ 五十二」、胡桃色表紙本は「湖月抄 よもきふ」。いずれも全1冊、書名は大字、巻名は小字。

蔵書印から胡桃色表紙本は三浦文庫旧蔵、藍表紙本は西村山郡律図書館旧蔵で、「御即位記念西村山郡立図書館」とある。おそらくは山形県西村山郡図書館であろうと想定される。なお、山形県西村山村は大正15年郡役所が廃止されたので、この御即位記念は大正天皇の即位時であろう。三浦文庫については不明。

『湖月抄』は『源氏物語』の注釈書で、本文全文に頭注、傍注などの形で注釈を施しているところから、本文とともに流布し、近世以降の『源氏物語』普及の中心となった。書名は、紫式部が石

山寺で湖水に映る月影を見て物語を書き始めたとする『明星抄』（三条西公条天文十（1541）年ごろ）などに記載される伝説に拠った。なおこの記事は『湖月抄』発端の巻に紹介されている。

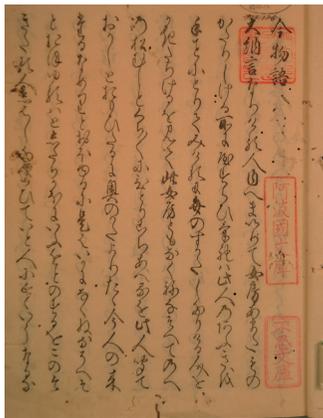
作者の北村季吟は江戸初期の文学者、貞門派の俳人で松尾芭蕉も門下に居た。貞門派の古典重視を体現した季吟はほかにも数多くの古典注釈を行い、歌道にも優れていた。幕府は元禄二（1689）年季吟を歌書方に任じ、八百石奥医師並みに待遇し、以来、歌書方は北村家の世襲職となった。『湖月抄』が中世以来の旧注の優れた集大成であるのに加えて、季吟の地位が『湖月抄』の権威を一層増すことになった。

数多くの再刊本が摺られ、多くの人に所蔵され、昭和の初期まで大学の教科書代わりに用いられた本書は、現在に至るまで『源氏物語』の注釈には欠かすことのできない存在となっている。（内田保廣）

4. 『今物語』

蔵書番号W913.4/144。版本。全1冊。縦26.5cm×横18.2cm。五つ目袋綴。表紙は胡桃色。外題は中央に刷題簽。料紙は楮紙。本文10行。35丁（遊紙1丁、本文34丁、跋1丁）。跋「天明六年丙午二月廿五日檢校保己一（34丁ウ）」。蔵書印「不忍文庫 阿波国文庫」。

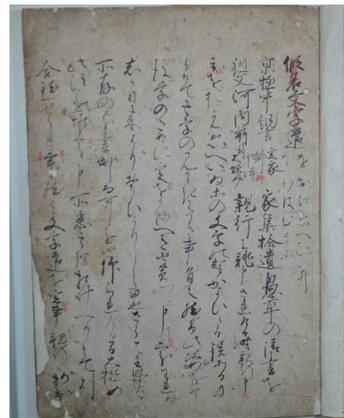
『今物語』は藤原信実（生没年未詳。一説に1176～1265年、89歳）編とされる説話集で、53編の短小な説話から成る。平安後期・鎌倉前期に材を取る和歌・連歌説話、靈驗譚、遁世譚、恋愛譚、笑話など多彩な内容を持つ。信実は歌人として為家歌壇を支えたが、画家としても「中殿御会図巻」「隨身庭騎絵巻」「三十六歌仙絵」また後鳥羽院の似絵の作者と伝えられる。本書は「不忍文庫」蔵書印から、幕臣にして和学者・屋代弘賢（1759～1841年）の蔵書が、弘賢晩年に阿波国徳島藩主十二代蜂須賀齊昌の「阿波国文庫」に献納された大部の蔵書内の一冊と知られる。（菅野扶美）



今物語初段



假名文字遣表紙



假名文字遣序

5. 伝里村紹巴筆『假名文字遣』

蔵書番号W811/110。写本。全1冊。縦26.0cm×横19.2cm。四つ目袋綴。表紙は柿渋色。外題は貼題簽。料紙は楮紙。複数の手による朱・墨筆の書入れあり。

卷末奥書に「三條西殿 前右大臣公條御奥書／書写云／此一冊小僧紹巴以数多之本考勘之／而舛謬猶有之先哲言校書如塵埃／風葉随掃樋有云々可俟後君子而已／天文廿一重陽前日記之称名野积」とある。三條西公條は戦国時代の公卿。父・実隆のあとを継ぎ、自身も源氏物語学者として注釈書『細流抄』『明星抄』を著した。伝筆者・里村紹巴は戦国時代の連歌師。『源氏物語』等古典籍を公條から学んだ。ただし本写本は別筆と思われる。

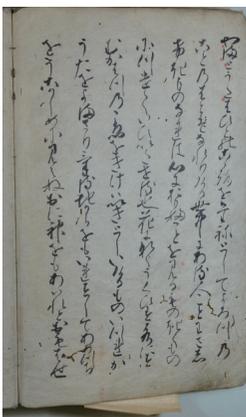
本書は藤原定家による「を・お・え・ゑ・へ・ひ・い・ゐ」の書き分け案に、「ほ・わ・は・む・ふ・う」の書き分け案を加えた、行阿による『假名文字遣』。奥書のあと裏見返しまでを使って「懷紙の書次の事」「中書の事」が書かれており、連歌を嗜んだ人物によって伝わったかと想像される。(咲本英恵)

6. 『古今和歌集』

蔵書番号W911.13/75。写本。全1帖。縦29.0cm×横18.7cm。綴葉装(列帖装)。表紙は柿渋色継紙風。外題なし。料紙は楮打紙(水なしの砧打ちか)。真名序がなく、朱で清輔本との校合書き入れがある。奥書なし。全202丁。書写者は不明。この大きさの本が流行した時期があり、室町期に公家以外の人物によって書写されたか。ただし、継紙風の表紙は室町期には見られないので、表紙・裏表紙ともに江戸期に改装されたと思われる。保存状態は良好。

古今和歌集は、1番最初の勅撰和歌集。平安時代に醍醐天皇の勅命によって、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則、紀貫之によって編纂された。

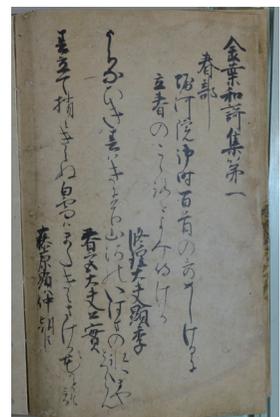
伝本は、元永本、雅経本、清輔本、俊成本、定家本の五系統に大別され、最も流布したのが定家本である。その中でも代表的なものに貞応二(1223)年に成立した貞応本と嘉禄二(1226)年に成立した嘉禄本があるが、嘉禄本には真名序がない。(岡田ひろみ)



古今和歌集仮名序



金葉和歌集表紙



金葉和歌集春上

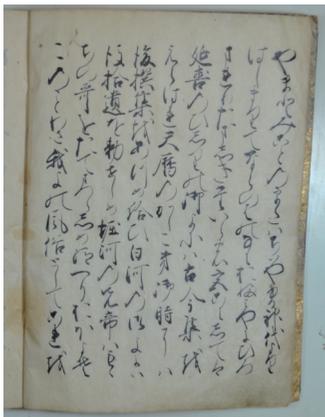
7. 『金葉和歌集』

蔵書番号W911.13.51。写本。全1帖。縦24.3cm×横15.3cm。綴葉装（列帖装）。枯草色地七宝繫丸錦文金欄表紙。外題・左題簽（雲紙）。見返しは秋の草花とたたんだ扇子を描いた平絹。料紙は打紙。改装してあり斐楮いずれか判別し難い。楮紙で中打ち補修。表紙は江戸前期か。書写年代は南北朝と推定され、卷末の識語によると冷泉為秀（為相の子。？～1372年）筆とされる。「極折紙」「代金拾枚目録」「極外題」「外題之極」がつく。「極折紙」には「金葉和歌集全部 冷泉為秀親翰 奥書烏丸光廣卿 筆痕無異論者也 享保六丑曆 霜月上旬 了仲筆」、「外題」には、「烏丸殿光廣卿 金葉集外題 印」、「外題之極」には「冷泉殿為秀卿 金葉和歌集全 印」とある。烏丸光廣（1579～1638年）は、江戸時代前期の公卿・歌人・能書家。

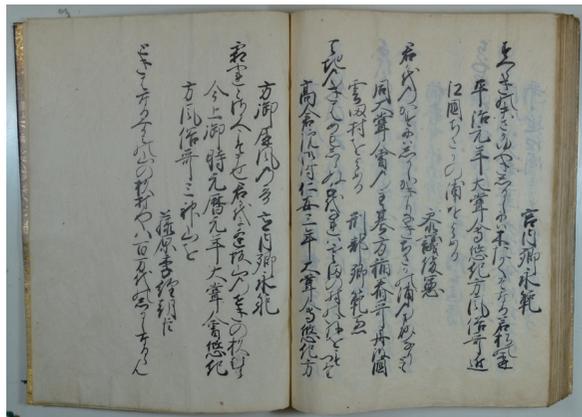
金葉和歌集は、5番目の勅撰和歌集で、これまでの勅撰和歌集が巻1～巻20までなのに対して、巻10までの歌集である。白河院（1053～1129年）の院宣により、源俊頼（1055～1129年）が編纂したが、何度も却下され、初度本、二度本、三奏本の大きく三系統の本文がある。最も流布したのが二度本であり、本書も二度本の系統に属する。総歌数695首。

本書の翻刻はすでに、（糸賀きみ江 松村雄二「共立女子大学図書館蔵 伝冷泉為秀筆 金葉和歌集（翻刻・解説）」『共立女子短期大学紀要・文科』22号、1981年）がある。（岡田ひろみ）

8. 伝一位局筆『千載和歌集』上・下



千載和歌集上巻仮名序



千載和歌集下巻巻末

蔵書番号W911.13。全2冊。縦25.7cm×横19.3cm。五つ目袋綴。表紙は紺地金泥秋草模様。見返しに金泥麻の葉模様がある。外題は書題簽。料紙は楮紙。

上巻は春歌上から賀歌まで、下巻は恋歌一から神祇歌までを収録。下巻末の識語に「這集上下巻全部飛鳥井殿雅親卿／法名栄雅御息女一位殿御筆書給者也／外題上冷泉殿為廣卿御真蹟也／乍憚任御意證之已而／寛永八年六月上旬 古筆了佐（花押）」とあり、折紙に「千載和歌集全部／飛鳥井栄雅息女／一位局御真筆與／紛者也／黄金七枚／享保十六年亥曆九月上旬 右筆了仲（花押）」と

ある。

『千載和歌集』は後白河院の命による第7番目の勅撰和歌集。撰者は藤原俊成。伝筆者・一位局は室町後期の公卿・飛鳥井雅親の娘で戦国時代の画家。土佐光信の画風を学び、人物絵、扇合などの絵を描いた。外題筆者・上冷泉為廣は室町後期から戦国時代にかけての公卿。正二位、権大納言兼民部卿に至るも、室町幕府第代11代將軍を辞した足利義澄に従って出家。江戸時代の随筆『耳囊』巻一に、能登にある為廣の歌塚の記事がある。識語を書いた了佐は烏丸光廣門下の歌人。本名平沢弥史郎。出家後、了佐と名乗った。古筆鑑定を近衛前久から学び、姓を古筆と改めた。関白豊臣秀次から「琴山」の印を賜り代々極印として用いたという（櫛司節男『宮内庁書陵部書庫涉獵—書写と装訂—』おうふう、2006年）。（咲本英恵）

9. 十三代集

蔵書番号W911.145/2/1～20。写本。全20帖。縦25.1cm×横18.2cm。綴葉装（列帖装）。浅黄色地紗綾形菊花唐花文錦表紙。外題・左題簽（金泥紙）。見返しはそれぞれ金泥で草花が描かれてあり、それぞれで図案が異なる。料紙は打紙してあり、斐紙、もしくは斐楮交ぜ漉き。江戸初期書写か。書写者不明。シミや糸切れ箇所が多く、改装の際に本文を綴じ間違えている部分もある。

十三代集は、八代集（古今集～新古今集）以後に成立した十三の勅撰和歌集のこと。

本書はそれぞれ四つの蒔絵文箱（「折紙」に「山にさくら」「まがきにとこなつ」「やまにもみぢ」「浪に月」との銘がある）に分けて納められている。文箱は、高さ10.5cm×縦27.5cm×横20.5cm。折紙の目録通り、「山にさくら」の箱には、新勅撰和歌集、続後撰和歌集、続古今和歌集上・下、続拾遺和歌集の5帖、「まがきにとこなつ」の箱には新後撰和歌集、玉葉和歌集上・下、続千載和歌集上・下の5帖、「やまにもみぢ」には続後拾遺和歌集、風雅和歌集上・下、新千載和歌集上・下の5帖、「浪に月」には新拾遺和歌集上・下、新後拾遺和歌集、新続古今和歌集上・下の5帖が入っている。

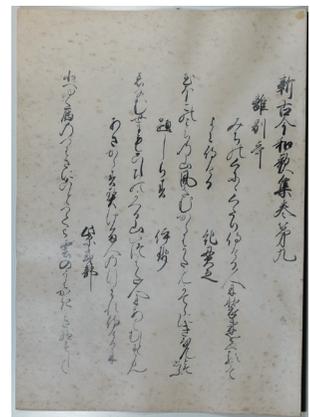
続後拾遺和歌集の中に、新古今和歌集が二丁分（右下図）混入しており、もともとは二十一代集



十三代集蒔絵文箱「山にさくら」



続後拾遺和歌集表紙



新古今和歌集

だったかと思われる。箱が書写時のものかどうかは不明だが、「浪に月」は「冬」というよりも「雑」のようでもあり、八代集が収められた文箱も二つあったかもしれない。箱・装訂の美しさ、料紙（紗漉・打紙）から17世紀後半に作成された武家の嫁入り本と想像される。（岡田ひろみ）

10. 伝藤原公修筆『源順馬名合』

蔵書番号W911.13/53。全1帖。縦24.8cm×横19.0cm。綴葉装（列帖装）。表紙は鉄色地枇杷文様緞子。見返しは金泥雁模様。外・内題は書題簽。料紙は鳥の子紙。奥書に「以或人珍藏古寫本臨書訖／権大納言藤原公修」とある。

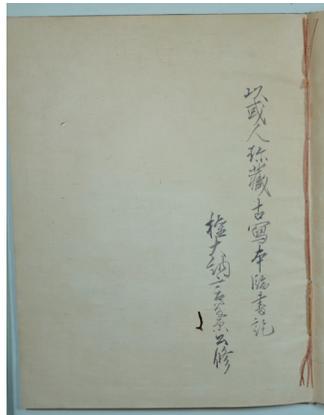
『源順馬名合』は『源順馬毛名合』ともいう。『類聚歌合』所収の歌合。十卷本系と二十卷本系の二種類の伝本があり、本書は二十卷本系統の本文にあたる。

「^{やまのはあけ}山葉緋」「^{このしたか}木下鹿毛」「^{あまのかほらげ}海河原毛」「^{ひさかたのつきかげ}比左加多能月鹿毛」など、「あけ」「かげ」といった馬の名前を和歌風にアレンジして歌題とし、それを詠み込んだ和歌を番わせている。馬の名を合わせた歌合は非常に珍しい。

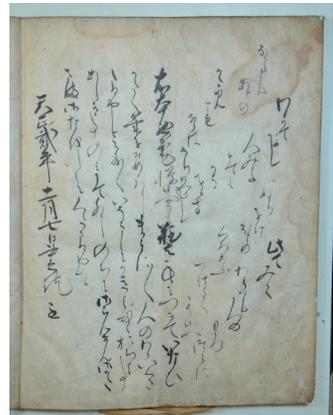
書作者・藤原公修は江戸時代の公卿。従一位内大臣。三条実起の子。文政九（1826）年に刊行された岩垣松苗による『国史略』の序を「前内大臣藤原公修」として手がけている。（畠本英恵）



源順馬名合表紙



源順馬名合・奥書



自讃歌・奥書

11. 『自讃歌』

蔵書番号W911.14/78。全1冊。縦24.3cm×横20.2cm。四つ目袋綴。表紙は色落ちが激しいが、青の墨流しの跡あり。外題・内題なし。料紙は楮紙。

奥書に「右本悪筆憚候へとも難去承につきていなひ／かたく筆をそめまいらせ候まことに一人のわらひくさ／なるへしみないそかしくかき申候ままおち申候事／あしき事のミにて候へく候のちに御らんせん御かた／さま御なをし候てくたさるへく候／天正貳年十一月七日書之訖（花押）」とある。

『自讃歌』は、『新古今集』歌人17名の歌を十首ずつ載せた秀歌選。藤原定家の日記『明月記』に、

後鳥羽院に命じられ自讃歌を撰進した記事が見える。室町から江戸期まで『百人一首』と並ぶ和歌の入門書として広く読まれた。本書の裏表紙には「山科卿藤原氏」の書入れがある。「山科家」は藤原四條家の分家。奥書にある天正二（1574）年は山科言継（正二位権大納言・贈従一位）の生存時期にあたる。言継は有職故実・和歌・医学の知識に長け、戦国大名とも広い人脈を作り、家領および朝廷の財政立て直しに尽力した。日記『言継卿記』がある。書入れは、この本がそうした由緒ある「家」から流れてきたものであることを示唆するか。（咲本英恵）

付記

本目録を作成するにあたり、佐々木孝浩氏、白戸満喜子氏、山本聡美氏に多くのご教示を賜った。深謝申し上げる。

最後に、白戸満喜子「共立女子大学図書館所蔵古典籍の料紙観察に関する報告書」（報告書作成日：2020年2月23日）を掲載する。本共同研究代表者である岡田と、白戸満喜子氏による料紙観察及び画像撮影の観察結果である。マイクロスコープでの料紙観察により、料紙の判断だけでなく、墨の濃淡や料紙の製作年代等も推測できることがわかる。写本は執筆者や制作年代が不明なことも多く、巻数が多い作品などは書写者が複数人いることも少なくない。紙の観察から、作品が書写された背景を想像することもできる。今後、書誌事項を整理研究するにあたって必要不可欠な分野になるであろう。

白戸満喜子「共立女子大学図書館所蔵古典籍の料紙観察に関する報告書」

本報告は以下に示した通りに実施されたものである。

- ・調査対象：共立女子大学図書館所蔵の資料群（詳細は各データ参照）

『伊勢物語』 および極札

『古今和歌集』

『金葉和歌集』 および折紙・極札・極外題

『千載和歌集』 上下冊および折紙

『源順馬名合』

『自讃歌』

- ・撮影場所：共立女子大学図書館貴重書閲覧室（4号館10階）
- ・使用機器：デジタル顕微鏡 400-CAM058 サンワサプライ社
- ・観察日：2020年2月19日
- ・観察者：岡田ひろみ・白戸満喜子
- ・繊維撮影：白戸満喜子

調査データ凡例

| No.（料紙データ通し番号） | |
|----------------|--------------------------|
| 蔵書番号 | （共立女子大学図書館による整理番号） |
| 資料名 | （共立女子大学図書館所蔵貴重和書展示目録による） |
| 撮影箇所 | （資料の部分） |
| 紙原料名 | （植物名カタカナ表記） |
| ①紙繊維写真 | （倍率およびスケールは表示されないため不明） |
| ②繊維写真の説明 | （白戸満喜子による） |
| ①②からわかる紙の特徴 | （白戸満喜子による） |

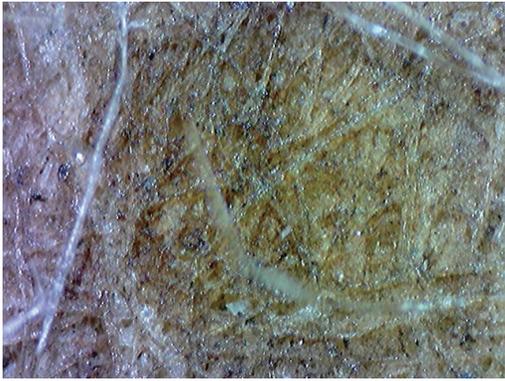
参照データ情報

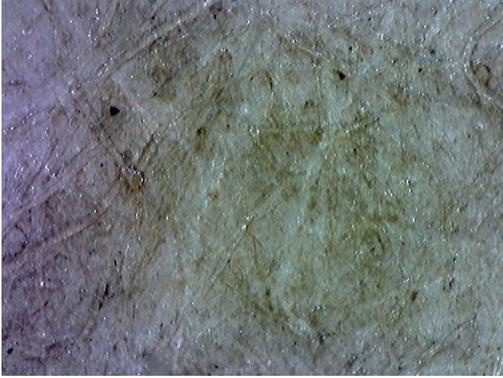
- ・繊維見本典拠：『繊維判定用 和紙見本帳』紙の温度 作成
- ・使用機器：デジタルマイクロスコープ VHX-7000 キーエンス社
- ・繊維撮影：白戸満喜子

| | |
|-------------|--|
| No.1 | |
| 蔵書番号 | W913.32/27 |
| 資料名 | 伝上冷泉為頼筆『伊勢物語』 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | ガンビ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 扁平であり長くない繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | ガンビを原料とした斐紙であり、表面加工はされていない。 |

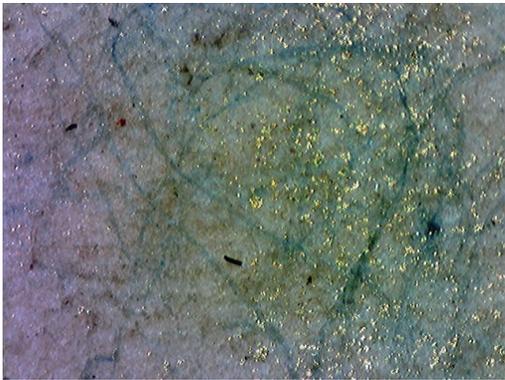
| | |
|------------|---|
| No.2 | |
| 蔵書番号 | W913.32/27 |
| 資料名 | 伝上冷泉為頼筆『伊勢物語』 |
| 撮影箇所 | 極札 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真-1 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維の中に青色繊維が混入 |
| ②からわかる紙の特徴 | 画面全体にわたる長繊維はコウゾ繊維にみられる特徴。混入している青色繊維は書写された墨や他の長繊維の下にあり、後から付着したのではなく、製紙工程で混入していることが明確である。これまでの観察経験で、真筆の極札には青色繊維の混入がしばしば認められており、この極札の信用性を裏付ける結果といえる。 |

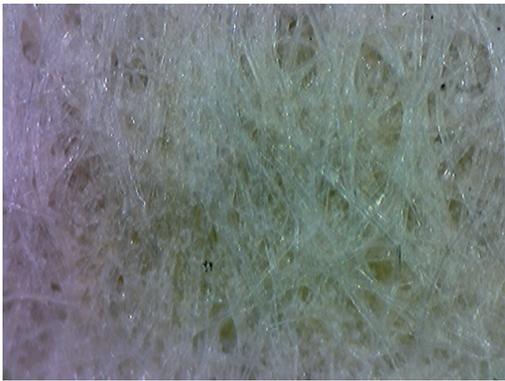
| | |
|-------------|--|
| No.3 | |
| 蔵書番号 | W913.13/75 |
| 資料名 | 『古今和歌集』 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 画面全体にわたる長繊維はコウゾ繊維にみられる特徴で、打ち紙加工（後述）が施されている。画面の黒点は墨の粒子と考えられる。 |

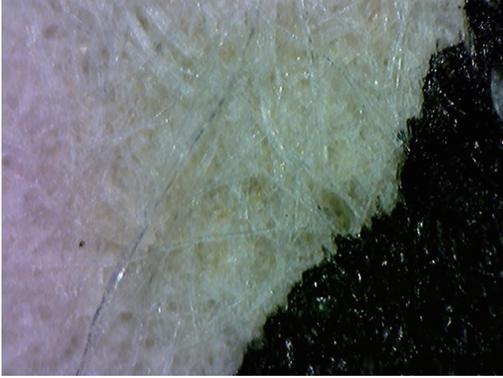
| | |
|-------------|--|
| No.4 | |
| 蔵書番号 | W913.13/75 |
| 資料名 | 『古今和歌集』 |
| 撮影箇所 | 表紙 上部 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維に着色 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 表紙は二種類の同色系の紙を継ぎ合わせた装飾加工が施されている。色の濃い上部部分は柿渋の塗布量が多く、繊維全体をコーティングしている。 |

| | |
|-------------|---|
| No.5 | |
| 蔵書番号 | W913.13/75 |
| 資料名 | 『古今和歌集』 |
| 撮影箇所 | 表紙 下部 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維に着色 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 二種類の同色系の紙を縦ぎ合わせた装飾加工が施されている表紙の下部部分。色の薄い下部は柿渋の浸透が弱く、No.4と比較すると繊維が染まりきっていないことが明確にわかる。 |

| | |
|-------------|--|
| No.6 | |
| 蔵書番号 | W913.13.51 |
| 資料名 | 『金葉和歌集』 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 画面全体にわたる長いコウゾ繊維に、打ち紙加工が施されている。左側の繊維は墨をはじいていることがわかる。中打ち改装されているため、本文料紙への打ち紙による墨の浸透防止効果か、補修時の水分によって墨が抜けたか、判別しがたい。 |

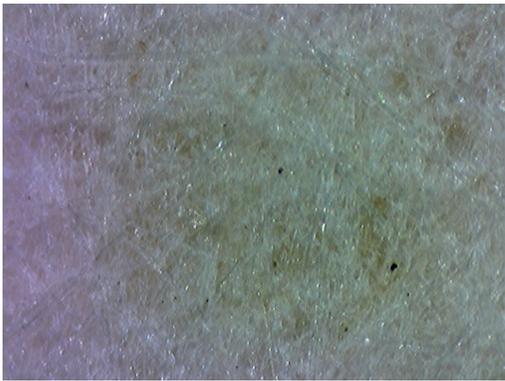
| | |
|-------------|--|
| No.7 | |
| 蔵書番号 | W913.13.51 |
| 資料名 | 『金葉和歌集』 題箋 |
| 撮影箇所 | 内曇の装飾 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 装飾加工として青色繊維が混入された料紙に金粉が載っている |
| ①②からわかる紙の特徴 | コストと手間のかかる豪華な装飾加工が施されている。 |

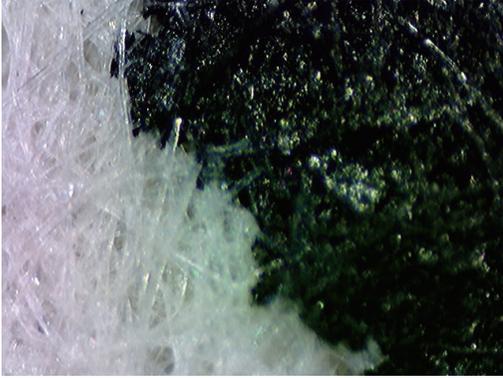
| | |
|-------------|--|
| No.8 | |
| 蔵書番号 | W913.13.51 |
| 資料名 | 『金葉和歌集』 折紙1 |
| 撮影箇所 | 表面の皴 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状のかなり長いコウゾ繊維がほぼ同一に配向 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 厚様の檀紙で皴はあるものの、ある程度の繊維配向が確認されるため、江戸時代以降の抄紙と考えられる。 |

| | |
|-------------|--|
| No.9 | |
| 蔵書番号 | W913.13.51 |
| 資料名 | 『金葉和歌集』 折紙 2 |
| 撮影箇所 | 墨付き部分 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状のかなり長いコウゾ繊維に墨がしっかりと浸透している |
| ①②からわかる紙の特徴 | 画面全体にわたるコウゾの長繊維が見えにくくなるほど、多量の墨を使用している。 |

| | |
|-------------|--|
| No.10 | |
| 蔵書番号 | W913.13.51 |
| 資料名 | 『金葉和歌集』 極札 |
| 撮影箇所 | 墨付き部分 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | コウゾの長繊維が見えにくくなるほど、多量の墨を使用している。浸透具合や墨色からNo.9と紙質は異なるが同時に書写されたと考えられる。 |

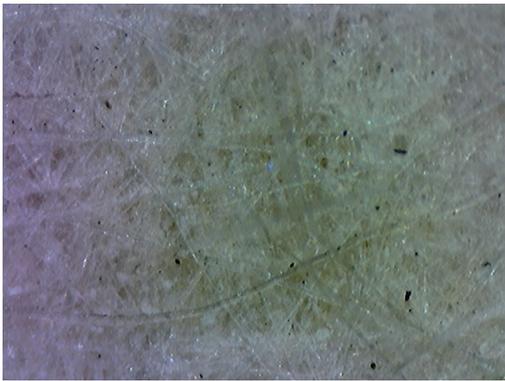
| | |
|-------------|--|
| No.11 | |
| 蔵書番号 | W913.13 |
| 資料名 | 伝一位局筆『千載和歌集』上 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 打ち紙加工が施された幅の広い長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | しっかりとした打ち紙加工が施されている。本来円筒形である繊維がつぶれているため、繊維の中心部分に影が確認できる。 |

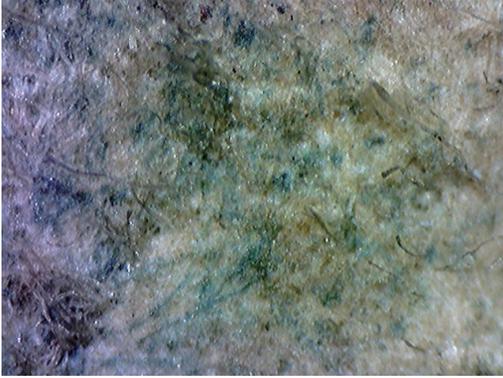
| | |
|-------------|---|
| No.12 | |
| 蔵書番号 | W913.13 |
| 資料名 | 伝一位局筆『千載和歌集』下 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 打ち紙加工が施された幅の広い長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | しっかりとした打ち紙加工で、本来円筒形である繊維がつぶれた痕跡として繊維の中心部分に影が確認できる。これはNo.11と同一の加工であり、上下冊同時に作成されたことが裏付けられる。 |

| | |
|-------------|--|
| No.13 | |
| 蔵書番号 | W913.13 |
| 資料名 | 伝一位局筆『千載和歌集』折紙 |
| 撮影箇所 | 墨付き部分 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状のかなり長いコウゾ繊維に墨がしっかりと浸透している |
| ①②からわかる紙の特徴 | No.9同様、画面全体にわたるコウゾの長繊維が見えにくくなるほど、多量の墨を使用しており、同筆の裏付けとなる。 |

| | |
|-------------|--|
| No.14 | |
| 蔵書番号 | W913.13 |
| 資料名 | 伝一位局筆『千載和歌集』折紙 |
| 撮影箇所 | 朱印部分 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 円筒状の長いコウゾ繊維の上に朱がのっている |
| ①②からわかる紙の特徴 | No.13同様、画面全体にわたるコウゾの長繊維が確認され、朱の粒子が繊維の上に付着している。ただし、墨書部分ほど繊維が確認できない状態ではない。筆写と捺印の違いである。 |

| | |
|-------------|--|
| No.15 | |
| 蔵書番号 | W913.13/53 |
| 資料名 | 伝藤原公修筆『源順馬名合』 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | ガンビ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 扁平であまり長くない繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | ガンビを原料とした斐紙である。打ち紙加工は施されていないが墨の滲みはなく、斐紙特有のシャープな墨線が確認できる。 |

| | |
|-------------|--|
| No.16 | |
| 蔵書番号 | W913.14/78 |
| 資料名 | 『自讃歌』 |
| 撮影箇所 | 墨付本文 第一丁表 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 打ち紙加工が施された幅の広い長繊維 |
| ①②からわかる紙の特徴 | 画面全体にわたる長いコウゾ繊維に打ち紙加工が施されている。画面の黒点は墨の粒子と考えられる。 |

| | |
|-------------|---|
| No.17 | |
| 蔵書番号 | W913.14/78 |
| 資料名 | 『自讃歌』 |
| 撮影箇所 | 表紙 内曇の青色部分 |
| 紙原料名 | コウゾ |
| ①紙繊維写真 |  |
| ②繊維写真の説明 | 装飾加工として青色繊維を混入している |
| ①②からわかる紙の特徴 | 製紙工程で未加工と青色染色加工2種類の原料を使用して抄紙される内曇の装飾料紙である。時代が下ると青い染料を用いた筆写で文様が描かれる場合があるが、本資料の表紙料紙は繊維が着色されていることが明確である。 |

【参照データ】「打ち紙加工による繊維の違いについて」

紙は原料となる植物が異なると性質が変化する。書写に用いられる場合、1：白色度 2：滲み具合 3：書きやすさなどにより、使用される紙に加工が施されることがある。代表的な加工が打ち紙加工で、滲みを防いだり筆運びが滑らかになったりする。特に麻類を原料とする紙は白色度が高い一方で、繊維が多角形であるため、紙の表面が平滑になりにくい。そこで打ち紙加工を施し、書写適性を向上させていた。以下は同一の紙で①打ち紙加工を施す前と、②打ち紙加工後の繊維状態である。

① 古代紙（原料：コウゾ） 200倍

② 古代紙打紙（原料：コウゾ）200倍



打ち紙加工は数日間紙を叩き続けるという記録が『延喜式』に残っており、その加工の結果、上記①にみられる立体的な繊維の状態から、②にみられるように一本ずつの繊維がつぶれて中央に影が確認できる状態となる。